

明るさがたぐり寄せる親近感

—津波伝承館解説員：熊谷葉月さんへのインタビュー—

関口真生

## 1. はじめに

私が「東日本大震災のフィールドワーク」を履修した理由は、震災が起きた町や住民たちを直接訪ねることで、どこか震災を他人事に感じている自分を変えるきっかけになればと考えたからである。

震災発生当時は小学 2 年生で東京に住んでおり、テレビで東北の様子を見たことは覚えているものの、その被害の深刻さを感じるにはまだ幼かった。その後入学した中学校では、その地区（東京都荒川区）が災害に弱いことから防災教育に熱心だったため、私も 3 年間で防災に対する多くの知識を得た。しかし大学 3 年生になった今は、その時学んだことをほとんど覚えていない。いくら学んでも他人事としか捉えられていなかったのかと悔やむこともあった。そんな経験から、大学生のうちにもう一度震災について学ぶ機会が欲しいと感じていた。

私は、興味を持った事柄についてはリサーチよりも先に現地に赴いたり人に話を聞いたりするタイプである。よって、座学ではなくフィールドワークの授業に自然と惹かれた。今夏の陸前高田訪問を通して少しでも震災を身近なものとして感じたいと思っていた。

## 2. インタビューまでの経緯

陸前高田を訪問する前の私の研究の問いは「多くの人が間近で亡くなったという出来事によって、残された人の生き方はどのように変わったのか」というものだった。その問いのもと陸前高田の人々をリサーチしていく中で、津波伝承館の解説員として取材を受ける熊谷葉月さんの記事を見つけた。その記事では 20 代唯一の解説員として紹介されており、下の世代に津波のことを伝える難しさについて語っていた。熊谷さん自身の体験や伝承館で働くことになった経緯などについて興味を持ち、取材の依頼をすることにした。津波伝承館のホームページのお問合せアドレスから、インタビューを行いたいため熊谷さんに繋いでもらえないかとお願いしたところ、熊谷さん個人のメールアドレスを教えて頂き、改めて震災についてのインタビューをさせて頂きたい旨を熊谷さんにお伝えしたところ、ご快諾いただいた。

8 月 1 日に私たちは陸前高田の道の駅に到着し、その足で津波伝承館に向かった。すぐに熊谷さんが出迎えてくださり、急な来訪であったにも関わらず展示の案内までしていただいた。展示の紹介を一通り終えると、熊谷さんはそれまでの明るい口調からガラッと雰囲気を変えて、「どうか他人事だと思わないで欲しい、誰にでも起こりうること」と伝えてくれた。この時の熊谷さんの語りが、「語り方」について私が興味を持った最初の箇所である。

## 3. 1 回目の熊谷葉月さんへのインタビュー

伝承館訪問の 2 日後にインタビューをさせて頂いた。先にインタビューの概要と話した内容を大まかに紹介し、その後私が特に気になった箇所について言及する。

### 3-1. インタビューの概要

2023 年 8 月 3 日 10 時～12 時半にキャピタルホテル 1000 のロビーで行った。同行者はチンさん（「東日本大震災のフィールドワーク」履修学生）、インタビュー協力者は熊谷葉月さん（津波伝承館解説員）である。

### 3-2.インタビューの内容

- **震災前の熊谷さんについて**

まず、熊谷さんの生い立ちについてお聞きした。生まれた時から陸前高田の気仙町に住んでおり、気仙中学校ではバスケット部に所属し、高校は高田高校で合唱部に所属していた。部活やりたさに高校に通っていたと語るくらい部活好きだったそうだ。

- **震災当日**

熊谷さんは当時高校1年生で、合唱部の練習の際に地震が発生し先生の指示で教室より高い位置にある野球部と陸上部のグラウンドに避難した。そこから街に津波が迫る様子を見ながら走ってさらに奥へ逃げた。すぐに戻ってくるだろうと思って上着や鞆などを全部置いてきてしまい、ワイシャツ一枚だったそうだがその日は寺の境内で布団などを借りて寝ることができた。

- **震災後100日くらいの出来事**

震災から2日後に熊谷さんの祖父が亡くなる。のちに震災関連死と認定された。家族全員が揃ったのは5日後くらいだった。50日程度避難所生活をしたあと、母親がピアノ教室で借りていた家の2階でもう50日ほど過ごし、その後仮設住宅へ移ったそうだ。また、お風呂には10日は入れなかった。ガソリンが手に入った時に知人の家に車で行って貸してもらった。高校1年生の年頃なのに身なりを気にすることができないのは結構きつかったそう。また、散歩しようにも加工食品が腐った匂いがして鼻がひん曲がりそうだったため下には降りられず、暇だった。友達と笑えるような雰囲気でもなかったが、友達の家の2階が流されて漂着し、漁ったら2階の荷物は無事だったというエピソードには笑ったそう。3週間後には合唱部の活動が再開したが、当初は楽器も譜面台も最初なかった。しかし合唱連盟が全て無償で送ってくれた。熊谷さんをはじめとした部員たちはステージに立ち続けることで恩返しをしようと決め、練習に励んだ。歌えないのがストレスだったから、部活が再開してよかった。

- **津波てんでんこについて**

熊谷さんは津波てんでんこという言葉を知った。しかし、津波てんでんこという言葉がなくとも当時はそれを実践していた。熊谷さんは家が海から走って30秒の場所だったので津波が来たら自分の家が一番最初に流されると分かっていた。事前に家族で避難場所を決めており、震災の時も家族はその場所で会うことができたそう。

- **その後の進路について**

熊谷さんは高校2年の時にNPOからの援助を受け、アメリカに10日間のホームステイを経験した。最終日に学生の前で震災の経験をスピーチする機会があった。話が終わったらみんながハグしてくれて、拙い英語でも伝わった感動があった。支援の感謝を伝えるには日本語では足りないと思い、英語をさらに勉強するために留学ができる大学に行こうと決めたそうだ。そして英語の先生の勧めもありAO入試を受験し、倍率は高かったが見事合格。その時に運を使い果たしたから今ライブのチケットが当たらないと話していた。

- **現在に至るまで**

本当は仙台など東北で就職したかったそうだが、入った会社で名古屋配属になった。コールセンターのような仕事が合わず挫折し、1年半で一旦実家に戻ったそうだ。その後陸前高田市観光物産協会で1年働き、地元のお店や地形など、住んでいても知らなかった発見があり楽しかったという。津波伝承館は現在4年目で、年代によってどのような話し方をすれば伝わるのかが分かってきた。例えば小学生には、テストでも積み重ねが大事のように避難訓練も積み重ねが大事。人は積み重ねたことしか発揮できないよ、と伝える。テストと準備の過程は同じなんだよ、と日頃からの行動を道徳的に問う。津波伝承館の解説員としての仕事は展示の解説のため自分自身のことを語ることは少ない。しかし、当時の写真を見せながら

「ここが私の中学校だよ」と言うのと身近に感じてもらえたりするため、経験が仕事に役立っていると感じるそう。

### 3-3. 震災を語る際の明るい口調

どの話も大変興味深かったのだが、その中でも特に印象に残っている語りを2つ取り上げたい。まず、震災当日のことを語っていた場面である。合唱部の練習の際に地震が起き、先生の指示で教室より高い野球部のグラウンドに避難した。そこから見た景色についての熊谷さんの語りを以下に引用する。は、明るいながらも臨場感溢れる独特の口調であった。

熊谷：10分くらいしてからかね（・・・）なんかみんなフェンスの方に行ってこうやって見てるの。（・）こう、ああいうふうにくこう緑のフェンスみたいなののはあって、ネットじゃねえな。なんかこう針金の鉄のさ、針金みたいなのあるじゃん。これにくこうやって見てくこうやって見てるひとがいるの。で、みんな見に行くから何だろうと思ってついてくくじゃん。（・）もう津波きてた。下。で、普通の津波って、あの一（・）映画とか見る？最初にさ、ぶわーんって波のさ、やつがあって、「東映」ってマーク。分かる？あの、映画とかで東映社がやるやつで、こう、すっげえ台風みたいなすごい荒波がさ、石にぶつかってぶわーんてなってる波の映像（空白）があるんだけど、あれをイメージしてたの。（・・・）違うのよ。（・）水の色がさ、すごい黒いの。（・）こんな感じの色。これよりもっと汚い。これとか、なんかいろんな色が混ざって気持ち悪い色してんの。黒に近いんだけど、なんかね泥とか、いろんなものがほんとに混ざって気持ち悪い。濁流のすっごい濃い感じ。ヘドロって感じの色？をしてて。

津波の描写に映画の例を出すこと、「ぶわーん」など音を表現する言葉を多く使うことなどから明るいながらも臨場感溢れる独特の口調であると感じた。また、同じように熊谷さんの明るい口調が現れている場面として、避難所生活についての語りがある。以下は避難所生活で印象に残っている場面を尋ねた時の回答である。

熊谷：コミュニティセンターにいた時は、最初は物資が限られたものしか届かないわけじゃん。たとえば賞味期限間近の菓子パンとか。何が届いてたかな、あんま覚えてないけど菓子パンはすごい覚えてて。（・・・）高田市ってすごいおじいちゃんおばあちゃんの人口が多いから、あんまり若い人に比べて食が進まない、食が細かったりするじゃない。だから、「若い人が食べなさい〜」って言って、いっぱいもらったわけ。でも賞味期限間近じゃん。食べないともったいないじゃんせっかく送ってくれたんだから。だから仕方なく食べるじゃん、すげえ太ったの。

関口：笑

熊谷：ストレスもあつたりとかして、すーっごい太っちゃって。（・）今よりね、5-6キロぐらい太ったかな。たった一ヶ月とか二ヶ月そこらで一気に太っちゃって。でもさ、家族にも言えないわけじゃん。こんなにたくさん食べれないよ、とかって文句言いながら仕方なく食べるじゃん。

このほかにも、震災当日～100日後くらいの出来事について語る際、熊谷さんは時に冗談を交えながら明るい語り口を保っていた。これは被災者の語りに対する「背筋を伸ばして真面目に聞かなければいけない」という私のイメージを払拭するものだった。私は、インタビュー前までは被災者に震災当日のことを聞いても大丈夫なのかと不安になるくらい聞くことに対して後ろめたさを感じていた。しかし熊谷さんの語りによって、徐々に被災者へのインタビューという形式を忘れて友達の話のような感覚で聞き入ってしまった。

### 3-4. 「感謝の気持ちを世界に伝える」という言葉の大きさ

2つ目の印象的な語りは、熊谷さんの大学進学に至るまでの話である。高2の時のホームステイの最終日に、現地の学生の前で震災についてのスピーチを行った。当時は震災からあまり時間が経っていなかったことと、被災経験を語るのが初めてだったこともあり途中で泣いてしまったという。スピーチが終わった後は、聞いていた学生たちが寄ってきて「ビックハグ」してくれたそうだ。その時の気持ちを、熊谷さんは以下のように語った。

熊谷：はーっと思って。わたし、へたくそな英語だったけど通じたんだ、と思って。心さえあれば通じるんだなって思ったんだけど、でも**感謝を伝える術としては日本語だけじゃ足りない**なって私は思ったのスキルとして。英語は世界共通語だからじゃ英語学んで直接自分できちんとあるように言えるようになりたいなって思ったから、ちょうど高校の担任の先生が英語の先生だったから、「先生私留学したいです大学で、留学できる大学ないですかねー」（以下略）

これを聞いた時、私は「感謝を伝える術としては日本語だけじゃ足りない」という言葉に引っかかった。スピーチをした当時は英語をそこまで話せなかった経験から、大学生のうちにまた留学したいと思ったのは納得できる。しかし、震災の感謝の気持ちを世界に伝えるために英語を学ぼうというのは、高校生が思うには大きなスケールだなと感じた。

また、上記の言葉と近い内容のことを津波伝承館で働こうと思った理由を聞いている際にも語っている。熊谷さんは、伝承館のミッションステートメントである「事実と教訓を伝える」「感謝の気持ちを世界中に発信する」の二つが、自分がやりたいことのルーツのゴールだったから伝承館で働くことにしたそうだ。このことから、感謝の気持ちを発信したいという気持ちは高校から現在まで一貫していることが読み取れる。

### 3-5. 明るさの出所と語り慣れによって隠された本音

紹介した二つの語りで私が気になったことをまとめると、熊谷さんの語りの「明るさ」と「語り慣れ」である。語りの明るさについては、伝承館で働く上で身につけた技術なのか、本来の性格からなのか分からなかったため気になった。私のインタビュー依頼を伝承館の仕事の延長のように捉えたことで明るい語りになっていたとしたら、熊谷さんがプライベートで友達や家族と震災の話をするときは全く違った語り方になるかもしれないと思った。

語り慣れについては喋るのが上手いとも言えるので良いことなのだが、「**感謝を伝える術としては日本語だけじゃ足りない**」の言葉のように上手すぎる語りに関して、逆に半信半疑な気持ちになってしまった自分がいた。なぜ自分がそう思ったのかを改めて考えると、テレビやYouTubeなどで流れてくる被災者像と重なる部分があったからだと思う。例えば、「震災翌日に残った品物を外で販売したイオン店員」や「感謝の気持ちを胸に合唱する24時間テレビの子どもたち」などが感動ストーリーとしてメディアによく取り上げられている。私はメディアでは分からない現地の声を直接聴くために陸前高田に来た。よって、メディアでの被災者と同じ人物像を感じる言葉が語られると、途端に疑いにかかってしまったのだろう。

熊谷さんの「感謝を伝える術としては日本語だけじゃ足りない」について、理由や経緯など言葉の出どころを改めて探ってみたいと思った。

#### 4. 2回目の熊谷葉月さんへのインタビュー（オンライン）

これらの疑問を解消するために、今度は「熊谷さんの語りの経験」に軸を置いた2回目のインタビューをお願いすることとした。

##### 4-1.インタビューの概要

調査年月日時：2023年10月30日15時～16時にzoom（オンライン）で行った。今回は同行者はなく、熊谷さんと1対1でお話を伺った。

##### 4-2.「身近に感じてほしい」から明るい

まず、初回のインタビューで語りの明るさがよく現れていた菓子パンの話などを例に出し、このような冗談を交えながらの語り口は熊谷さんの本来の性格ですか？それとも震災の話をする時だけ一段と明るくなる感じですか？と質問した。

熊谷：もともとの部分もあるかもしれない。こういう話するときってわざと明るくするとわざとらしいのかわかると思うんだけど（・・・）別にそういう気持ちで話しているわけではないかな。

関口：じゃ喋っていると自然とそうなっているというか。

熊谷：そうだね。（・・・）もあるし、なんだろうな、なんか、やだー、なんか私今日鼻声だね。鼻声だ。えーっと、ごめんごめん。（・・・）震災の話って側から見るとすごい暗い、いい話じゃないじゃない。

関口：はい。

熊谷：いい話じゃないけど、こういう震災の中でもクスってすることは結構あったりするわけ。（・・・）悲しいことだけだとなんか、なんて言うんだろうな、こういうこともあったんだよっていうので、何だろう。悲しいことの中でみんな大変な中だったけどこういうクスッとするような、まあブラックジョークみたいになってるかもしれないけど、でもなんかこういう話もあるんだよっていうのも結構**身近に感じて欲しい**のもあったりする、かな。だからあえてなんかこういう、津波がありました、何もかも全部失っちゃいましたよって話だけだと、なんかこう**実感がわかない**というか**生活感がない**っていうか。なんか食べて太っちゃいましたとかだとさ、当時の自分は女子高生だから気になるお年頃だったっていうのもあるし、聞く人にもよって年が近かったらこういう気持ちとかあるなーとかってこう**身近に感じてくれる**から、なんかこうおとぎ話のように聞こえるかもしれない物語を1人喋ってるんじゃないくて、ちゃんと現実起こってることなんですよ、とか**身近に感じて欲しくて**こういう風に喋ってるのかもしれない。わざとらしく物語風に喋ろうという気は毛頭ない。から、こういう口調になっちゃうんじゃないかな。そういう気持ちもあるからもあるし、もともとこういう喋り方っていうのもあると思います。

熊谷さんは語りの中で「身近に感じて欲しい」という言葉を3回使った。震災のことを身近に感じさせる難しさを実感している伝承館の解説員ならではの思いからかもしれない。熊谷さんは、他人事に思わせないよう来場者の住む地域の特徴や年齢などをできる限り調べ、案内の中でその人の地元の話をしたり、小学生にはわかりやすい言葉を選ぶなど工夫を凝らしているそうだ。ちなみに、私たちが伝承館を見学した最後に熊谷さんが雰囲気を変えておっしゃった「どうか他人事だと思わないで欲しい、誰にでも起こりうること。」について真相を尋ねたところ、それも私たちに震災のことを身近に感じて欲しくて出た言葉だったそうだ。これらのことから、「身近に感じて欲しいから」が熊谷さんの明るい語りの理由なのではないかと私は考察した。

私は、初回のインタビューの時に熊谷さんの被災経験を語る際の明るさに驚いたことから、逆説的に「被災者の話＝真面目に聞くべき」と思っていたことを自覚させられた。これは、私が普段触れる震災関連の書籍、ネットの記事、テレビの報道などは決まって真面目な語り口調であるため、被災者の話というのはそういうものだと刷り込まれていたからだ。ドキュメンタリー映像などではとりわけ震災で家族を亡くした方の取材であったり寂しげな音楽が流れていたりする。このようなメディアコンテンツが熊谷さんの言う「実感がわからないというか生活感がない」ものなのかもしれない。私は、熊谷さんの語りの明るさによって、語られる内容に親近感が増すように感じたのだ。熊谷さんの話を「友達の話のような感覚で聞き入ってしまった」と前述したが、これは「語る被災者/聞く取材者」という場の設定ではなく「自分の人生で印象に残った出来事を話す人/それを聞く人」という場を構築していたことに由来すると考察した。

#### 4-3. 「感謝を伝えたい」の意味

次に、高校生の時のホームステイ経験の話で出てきた「**感謝を伝える術としては日本語だけじゃ足りない**」という言葉について、「英語で感謝を伝える」とは具体的にはどういう状況を想像していたのかと質問した。

熊谷：直接具体的な人に感謝の気持ちを伝えたいですっていう感じではなくて結構 バフッとしてたかも。

関口：なんとなくその当時スピーチからもうちょっと震災について色々喋ってみたいという気持ち、大学でもそういうのやってみたいみたいな気持ち（ですか）

熊谷：まあ震災の話はするかどうかかわからないけどとりあえず英語を学んでって損はしないうって思ったのもあるし、なんなら海外で生活するっていうのはめっちゃ楽しいなっていうのがこの ホームステイの中で一番の収穫だったから、もう 1 回ちょっと、留学できたらいいな一、そしたら 英語も学べていいじゃんって思ったの。だから二の次なんかね、直接感謝の気持ちを伝えたいっていうのは本当に 2 の 3 の 4 の 5 の次ぐらい。ぐらい。

この語りによって、1 回目のインタビューでは分からなかった「**感謝を伝える術としては日本語だけじゃ足りない**」以外の英語を学びたい理由が明らかになった。もちろん、感謝を伝えたいというのも英語を学びたいと思った理由の一つであることは変わらない。しかし、他にも「とりあえず英語を学んで損はしない」ことや、「留学で生活する楽しさ」なども理由に含まれていた。

熊谷さんは、大学の AO 入試でホームステイの経験と被災者支援への感謝を題材にプレゼンテーションを書き、合格している。そのプレゼンテーションは、担任の英語の先生にかなり助けてもらいながら作ったそう。よって、熊谷さんが今持っている被災者支援への感謝の気持ちを伝える言葉を最初に授けたのはこの時の高校の先生の可能性が高い。プレゼンテーションの内容を練っているうちに、そして大学入学後も留学理由などを説明する時に「**感謝を伝える術としては日本語だけじゃ足りない**」のような言葉を用いていたことで、最初は先生からの借り物だったかもしれない言葉が自分の本心として語れるようになったのかもしれない。

#### 4-4. 被災経験＝マイナスのイメージを変えるために

ホームステイ先でのスピーチの経験を経て AO 入試でも震災を取り上げたという話の中で、震災という題材が入試のプレゼンテーションを扱う上で有利に働くことも想定していたのか、という質問をした。すると震災直後の合唱コンクールで、あれは「頑張りましたね」の賞だったかもしれないと熊谷さんが思っている出来事について話してくださった。

熊谷：私はその時 ちゃらんぽらん だからそんなことを考えてないけど先生は多分考えてたんじゃないかな。

関口：あー大人の。

熊谷：うんそう。私あの時ガキンチョだからさ、とりあえず今日の前のこと頑張ろうとしか思っていないからさ。だから先生はすごい頑張ったんだと思うよ。でも過ぎてみればそうだなって思う。合唱もそうだったけど私震災あって次の次のコンクールの時、これ絶対おまけだろうって、震災あったから頑張りましたねで賞を取ったようなもんだと思うもん。

関口：賞取れたんですか。合唱で。

熊谷：県内のそのコンクールで金の上？金じゃないな 金いったことないから。最後の金の上？ えー忘れた。5 番目くらいだったのかな。県内で。東北大会に行ったんだよ。でも絶対あれ震災があったから頑張りましたねっていうのでおまけで多分点数高かったんだと思うよ。

関口：えーそんなことあるんだ。

熊谷：ある。あると思う。まあ頑張ったって、じゃめっちゃ手抜いたんかって言われたら一生懸命頑張ったんですけど、でも審査員の中には多分そういう気持ちでつけた人もいるんじゃないかなって思う。当時岩手県レベル高かったからさ。私たちよりもいい演奏してた学校いたと思うよ。そういうのあるんだろって思う。だってインパクト強いもんね。そりゃそうだよ。

関口：そうですね。

熊谷：けっこうその、私が英語でその大学に合格したのも震災っていうテーマじゃなかったら受かってないんじゃないかな。

関口：そう考えると震災にお世話になったというかおかげで踏めたこともある（みたいな）

熊谷：そうなの。そうなのだから私、震災のこと全然ね、マイナスに捉えてないんよ。むしろプラスな方が多いからさ私にとって、人生の起点だったからさ。何だろうからね、だから振り返ってみるとあの時は確かに悲しかったけど、その後がすごく私にとってはプラスなことが多かった、し、気づかされる部分がすごい多かったから、別にあの時は悲しいけど今結果的に見たらプラスの方が多いかも。

関口：なるほど、それがなんかこう、明るく語れる理由の一つなのかもしれないですね。

熊谷：ああそうかもね。そうかも。

特に後半部分の語りでは、熊谷さんの声に熱が入っていた。震災を経験したことを十二分に活かしたと捉え、震災復興にプラスな感情を抱いている熊谷さんは、被災経験＝マイナス、辛いだけの出来事と思われるのを嫌がっているように見えた。大学受験で震災を扱ったこと、震災があったから留学もでき、津波伝承館でも働けたこと。これらの出来事をプラスに捉えているからこそ、震災のことをマイナスに捉えておらずむしろプラスの方が多いと表現している。これらの出来事を恩恵と捉えた結果プラスになっているのであり、それを聞き手が「震災は大変でしたね」のようにマイナスに捻じ曲げてしまったら熊谷さんの軌跡全てを無視していることになる。別の箇所では、伝承館の仕事で案内を終えた後お客さんに「大変だったね」と言われるのは、身近に感じてもらえなかったと感じてあまり好きではないとも語っていた。これは、災害を（自分にいつ降り掛かるか分からないのに）他人事としか思っておらず、伝承館で伝えるべき教訓が伝わっていないと思うからだそうだ。

もちろん辛い経験もあったに違いないが、辛い時に自分を支えてくれた人や支援も同じくらい心に残っているだろう。辛い部分だけが拡散されて震災に暗いイメージがついている現状を見て、自分がプラスに捉えている出来事や支援への感謝の気持ちの部分をもっと発信したいと思ったのではないかな。

#### 4-5.語り部でないのに語る理由

伝承館の解説員はあくまで展示を伝えることが目的のため、個人の語りは熊谷さんの仕事に含まれない。それは語り部の仕事であり、熊谷さんは語り部ではない。しかし、熊谷さんは津波伝承館の若手解説員として新聞などで取材を受ける際、伝承館の紹介の他に先ほどのホームステイの話などの個人的な話も掲載されることが多い。なぜ仕事ではないのに個人の語りをしているのか（このインタビュー依頼もなぜ受けてくれたのか）が気になり、聞いてみた。

熊谷：自分のこと語れない人多いんだよ被災した方って。私はたまたま家族の中で誰も死んでないのよ。誰か死んでたら私も多分語れないと思う。

だから米沢さん（米沢商会）の社長とか、亡くなった方の親御さんとかが語り部やったりとかする方いるんだけど、その人はマジで尊敬するもん。私は身内が誰もなくなってるから、だから 喋れるの。誰かが、語り部さんの誰かが言ってたんだけど、その人たちが語れない分私は頑張ってるみたいなの言ってるけど、私はそういうことは全然思っていないけど、その人の代わりになって喋るっていう風に思っていないんだけど、何だろうこう

（・・・）たまたま 喋れる状況にあったから喋るってだけ。

どうしても喋りたいっていうわけではないんだけど、口を開けば喋れますよみたいな感じかな。だって自分の経験した事って無駄じゃないと思ってるから別に恥ずかしいっていう気持ちもないし、悲し、確かに悲しかったことだけど、まあ別に今となってはね、それがあったから今があるわけだから、別に話してて無駄じゃないもんなって思っちゃう。たまたま、たまたまです。状況が他の人よりもプラスだったよかった、よかったって言い方は難し、あれなんだけど不幸中の幸いだったからって感じかな。

語れない人が多いというお話を聞いて、熊谷さんの他にもう一人取材しようと思っていた方がいたがやりとりをしている途中で連絡がつかなくなってしまったのを思い出した。普段語らない人は語ることが億劫になるだろう。そんな人がほとんどの中、積極的に語りを続けた熊谷さんのみ、取材の注目を浴びてしまったという背景もある。そして、「たまたま語れる側にいたから」という理由だけにしては、熊谷さんにはかなり時間を割いて頂いている。

この取材がメディア用ではなかったのも引き受けてくれた理由の一つらしい。熊谷さんは一度震災関連で名前を出してテレビに出た際、自身の **Facebook** に知らない人から多くのフォローリクエストが来たことがあったそう。それ以降大きく名前が出る記事には少し抵抗を感じている。また、新聞記事に自分の話が掲載される際、自分が本当に伝えたかったことから少しずれた趣旨の記事になっていることもあったそう。私が気がついたこととしては、熊谷さんの祖父はもともといつその時が来てもおかしくない状態だった中で震災があり、2日後に亡くなり後に震災関連死と認定されたそうだが、記事には大抵「祖父が震災関連死をした」という文面で掲載されている。もちろん事実として間違っていないのだが、これだけ読むと違った捉え方もされるだろう。

熊谷さんは震災で「プラスなこともあった」から喋れる側にいると語ったが、もともとの性格の明るさや喋りの上手さなども大きく関係していると思う。今回お話を聞いたのが、今までの私の震災の暗いイメージを払拭してくれる熊谷さんでよかったなと思う。

### 5. まとめ

第一回の取材後に私が出した問いは、熊谷さんの語りの明るさの理由と、「感謝を伝える術としては日本語だけじゃ足りない」という言葉が出た経緯の二つである。まず、熊谷さんの語りの明るさにつ

いては、「身近に感じてほしいから」が大きな理由であると分かった。もっと言うと、辛かった出来事の語りは多くのメディアがすでに取り上げている上に親近感が湧きづらく、身近に感じてほしいという熊谷さんの本意にそぐわない。熊谷さんは震災に対してプラスの（感情の）方が多いと言っており、むしろ悲しい口調で語る理由がない。よって、明るいのは必然であり、むしろ最初明るさに違和感を持った自分の方が今となっては不自然だ。熊谷さんの震災以降の出来事の話は、震災を起点にしてその後のキャリアを構築していく人の話として、震災を抜きにしても大変参考になる前向きな話だと感じた。

他人事ではなく身近に感じてもらいたいという熊谷さんの思いは、伝承館の仕事と個人の語りの両方に見られた。合唱コンクールの「頑張りましたね」賞や、他者から言われる「大変だったね」は、その人が被災の外側にいる立場の傍観者であるから言える（できる）ことだ。そうならないよう、伝承館に訪れた方には、フィールドワーク初日に私たちにかけてくれた言葉と同じように、「誰にでも起こりうること」だと認識してもらうことを心がけているそうだ。そして震災の暗い出来事や辛いことよりも、支えてくれた人たちへの感謝の方を積極的に発信する。

次に「感謝を伝える術としては日本語だけじゃ足りない」について考察する。支援への感謝の気持ちを伝えることは、留学を希望する理由としては最初「2,3,4,5の次」だった。しかし大学入試のプレゼンテーションで気持ちを認（したた）めたこと、そこで練り上げた言葉をその後幾度か自分の口で他者に伝える経験をしたことで、感謝の気持ちを伝えたいという気持ちの解像度が当初より上がっただろう。高校の時は背伸びした語句だったものが、次第に本心から言えるようになっていったのだと思う。「感謝を伝える術としては日本語だけじゃ足りない」は、8月のインタビューでその場で考えた言葉ではなく、今までの語り（留学理由を他者に説明することや取材経験含め）の蓄積によって出てきた言葉なのだろうと思う。

私は陸前高田に行くまで、震災や被災者のことを「大変な出来事」「辛い経験をした人」のように平たいイメージを持っていたと今回の取材を通して感じた。瓦礫や津波の様子、家族を亡くした方のエピソードなど、テレビやネットを通した東日本大震災はあくまで切り取られた部分でしかない。もちろんそういった凄惨な事実を伝えていくことも大切だが、そればかりだと遠い土地であった悲しい出来事、という印象に留まってしまう。今回陸前高田を訪問して切り取られない生の声を多く聞くことができたことで、被災者というぼんやりした像から〇〇さんの経験、〇〇さんの経験のように個別具体的なイメージを持つことができた。その中にはもちろん熊谷さんのように、震災を自らのターニングポイントとして捉え、前向きな気持ちで語れる人もいる。陸前高田の住民と言っても被災状況や震災に対する気持ちはバラバラで、「被災者たちの気持ち」という共通のものはどこにも存在しない。当たり前のことだが、行ったから気づけたことでもある。

また、熊谷さんのように震災のことをマイナスに捉えていないとはっきり言える人がいたことは、正直私にとっては驚きだった。私は最初「震災の話なんて被災者に聞いても良いのだろうか」と思うほどだった。しかし今は、熊谷さんのような前向きな方のお話を聞いたことで、以前に持っていた被災者に対する漠然としたマイナスなイメージはなくなった。

それが他人事ではなくなったと言うのかどうかは分からない。自分の身に起きていない出来事を自分ごとと捉えるのは、戦争しかり災害しかり難しいものである。ただ、陸前高田を訪問する前よりも、今の方が陸前高田とその住民たちを身近に感じているのは事実である。次にインタビューする機会があるなら、逆に震災で辛い経験をした方のお話を聞くことで自分の中の被災経験者像の幅が広がるかもしれない。

街の復興は終わっており、道の駅も伝承館も賑わっている。2024年3月で13年が経つのだから「大変なことがあった」の先のことを発信していきたいのだと感じる。私もそうだったように、調べるだけではわからないことが津波伝承館やかさ上げされた陸前高田の街並み、祈念公園を訪れることで実

感できる。来てもらうことが、他人事だと思わせない第一歩に違いない。それが、熊谷さんのルーツのゴールであった伝承館を通して世界に感謝を伝えることなのかもしれない。

#### 参考文献

桜井厚, 2002『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房

やまだようこ, 2007『喪失の語りー生成のライフヒストリー (やまだようこ著作集)』新曜社.

札幌大谷大学社会学部学生有志つながろう東北, 2014, 7『ライフストーリーから紡ぐ陸前高田の暮らしと文化 = The life and culture of』

鈴木岩弓, 2018『〈死者/生者〉論: 傾聴・鎮魂・翻訳』ペリかん社

戸羽太『被災地の本当の話をしよう: 陸前高田市市長が綴るあの日とこれから』ワニブックス〈plus〉

矢吹康夫, 2017『私がアルビノについて調べ考えて書いた本: 当事者から始める社会学』生活書院

#### 新聞記事

「「あの日」に学び「あした」を守る: 震災後生まれにつなぐ「命のバトン」／下 いつでも安心して語れる場に」 2023.03.06 毎日新聞 (東京朝刊)

「東日本大震災10年: 次の災害、犠牲者ゼロに 自らも被災、熊谷葉月さん(26) 岩手・津波伝承館で英語解説員」 2021.03.29 毎日新聞

#### ウェブサイト

東日本大震災津波伝承館 いわて TSUNAMI メモリアル <https://iwate-tsunami-memorial.jp/>